

2012年5月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

個性とその意義

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「薬草論品」

1. 薬草論品の概要

三草二木の譬えを通じて、本質の平等相と現象の差別相、衆生と仏の関係が説かれます。

2. 仏の功德（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.66）

迦葉よ。まことにそなたのいうとおりです。仏の功德は無限です。如来は、真理を知りつくし、それを自由自在に説くことによって、ありとあらゆる人びとを平等に生かし、最終的には仏の智慧にまでみちびくのです。

3. 三草二木の譬え（同p.66～67）

(1) 雨を待つ草木

たとえていえば、この地上にはいろいろさまざまな草木が生いしげっています。その草木は、大きさも大・中・小があり、性質も、すがた形も、千差万別です。しかし、すべての草木に共通していることは、ひたすら雨のうるおいを欲し求めていることです。

(2) 雨を受けて生長する

そこへ、空いっぱい大雲がひろがり、雨が降ってきました。雨は、地上にくまなく降り注ぎます。あらゆる草木を、平等に、そして豊かにうるおしてくれます。小さい草も、中くらいの草も、大きい草も、小さい木も、大きい木も、みんなそのうるおいを受けて生気をとりもどし、いきいきと生長していきます。

(3) 生長のしかたがちがう

こうして、おなじ雨が、一様にふりそそぐのですが、それでも草や木は、その種類によって生長の度合いがちがい、すがた形がちがい、咲く花がちがい、結ぶ実がちがいます。

4. 譬えの意味（同p.67～69）

(1) 如来

迦葉よ。如来は、空全体をおおう大雲のようなものです。如来の説く教えは、地上にくまなく降り注ぐ雨のようなものです。

(2) 衆生

一切衆生は、大・中・小ささまざまな草木のようなものです。

(3) 教えは一相一味

如来の説く教えは、この宇宙の真理です。真理というものは、その根本においてはただ一つ、〈諸法実相〉ということしかありません。したがって、如来の説く教えも、降り注ぐ雨とおなじく、ただ一相一味なのです。

(4) 教えの受け方に違いが生じる

ところが、人びとの天分や性質は、ひとりひとりちがいます。生い立ちも、健康も、環境も、職業も、それぞれちがいます。そういうさまざまな条件のちがいがあるために、みんなが等しくもっている仏性はまったく平等であるにもかかわらず、真理の雨の受けかたにさまざまなちがいが生じてくるのです。

(5) 違いがあっても平等

しかし、いくら受けかたがちがっても、それぞれの人が真理の雨を受けて、天分の性質のままに生長し、それぞれの花を咲かせ、それぞれの実を結ぶという点においては、まったく平等なのです。

(6) 自分のことを知らない

植物は、いったい自分が大きな草なのか、中くらいの草なのか、小さな草なのか、そのようなことはすこしも知りません。知らないままに、とにもかくにも、自分のもって生まれた性質をすくすくと伸ばしていくのです。

人間も、仏の目から見れば、この草や木と似たようなものです。自分の現在の境地が、いったいどの程度のものであるか？ この宇宙のなかにおいて、自分はどれほどの価値をもっているのか？ それを正確に知りうる人はありますまい。

(7) 仏だけが知っている

知りうるのは、ただ仏のみです。仏は、すべての人びとの現在おかれている境界と、精神的な境地の区別を正しく見きわめ、しかもすべての人びとがその根源においてはまったく平等な存在であることを、ハッキリ知っているのです。

(8) ふさわしい教えを説く

そういう明らかな智慧にもとづいて、それぞれの人にふさわしい教えを説き、すべての人を人生苦から解脱させ、人間としての正しい向上の道をたどらせるのです。

(9) 教えの根本は平等

ですから、仏の救いにはいろいろな形があるように見えます。けれどもその根本においては、仏の教えはただ一つであり、すべての人に平等にふりそそぐものなのです。

(10) 条件の違いによって形の上のちがいがあらわれる

みなさんの、形のうえにあらわれた天分・性質・環境その他の条件がちがうからこそ、形のうえにあらわれた仏の教えも、そして救いも、ちがうように受け取れるのです。そこが仏法の至妙なところなのです。

5. 如来の説く教え

(1) 如来の説く教えはただ一つ

如来の説く教えは、宇宙の真理です。宇宙の真理はただ一つ“諸法実相”です。いつ、どこで、だれに向かって説いても、諸法実相を説くだけです。

(2) 教えの受け方に違いがある

人びとは、平等に仏性を持っていますが、天分・性質に違いがあり、生い立ち・健康・環境・職業などにもちがいがあります。このため、同じ諸法実相の教えを受けても、教えの受け方に違いが生じます。教えの受け方が違うから、生長のしかたに違いが生じます。

(3) 生長の本質は平等

生長のしかたに違いが生じるといっても、真理の教えを受け、それぞれの性質をすくすくと伸ばすという意味では平等です。教えを受けて人生苦から解脱し、人間としての正しい道を歩むようになるという意味では平等です。

6. 平等相と差別相

(1) 本質の平等相

すべての人は、真理に生かされているという意味で平等です。

- ① すべての人は、日々変化し続けます。
- ② すべての人は、他の人々とつながり合い、互いに生かされ合い生かし合っています。
- ③ すべての人は、原因・条件・結果・影響の原理の中で生きています。

(2) 差別相は個性

- ① 人々の天分や性質はひとりひとり異なり、千差万別です。これは個性にはかなりません。
- ② 人にはそれぞれの生い立ちがあり、現在の職業や立場があり、健康状態があり、生活環境があります。このため、自分と同じ人は一人として存在しません。
- ③ 人はそれぞれに家庭的な役割を担い、社会的な役割を担っています。それらの役割の内容はひとりひとり異なっています。

(3) 平等相と差別相の意義

- ① 本質的には平等な人びとが、千差万別の個性をそなえ、互いに生かされ合い生かし合いの関係になることで、人びとの間に調和が成り立ちます。
- ② 個性は千差万別ですが、根源的には平等でありますから、互いにつながりあい、協力し合うことができます。
- ③ 自分と他人とは、根源的には平等であることを意識しながら、互いの個性を認め合うことができれば、より深い協力関係を結ぶことができます。

7. 平等相の迷い

- (1) ものごとの本質の平等相にばかり目を向けて、現象の差別相を見ない迷いが平等相の迷いです。
- (2) 現象の差別相を見ませんから、性格の違いも、能力の違いも、欲望や願望の違いも無視して、一律にものごとを考え、判断し、行動します。このために、現実合わないことばかり言ったり、行ったりすることとなり、世間離れをした人物になってしまいます。

8. 差別相の迷い

- (1) 差別相の迷いとは、現象にあらわれた差別相のみにとらわれることによって、ものごとを見誤り、行ないを誤ることです。
- (2) 差別相の迷いから優越感・劣等感などが起こり、ここから慢心・軽蔑・侮辱・嫉妬・憎悪・反抗などが起こります。
- (3) 差別相の迷いから、貪欲による争いや苦しみが、限りなく起こってきます。
- (4) 差別相の迷いから、自分と異質な人、違和感を感じた人に対して、人格否定の感情をもつことがあります。この感情から、争いや苦しみが起こってきます。

9. 言葉

(1) 一相一味

雨はどこをとっても同じ水ですし、同じ味です。これを、一相一味と言います。

仏の説く教えは、いつ、どこで、だれに向かって説いたものでも、その中身は同じ真理です。ですから仏の教えは一相一味なのです。

リーダーたる人は、部下に対して、一相一味であって欲しいと思います。

(2) 境地

① 「境地」について、次の経文があります。

「アーナンダよ。今でも、また私の死後にでも、誰でも自らを島とし、自らをたよりとし、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとし、他のものをよりどころとしないでいる人びとがいるならば、かれらはわが修業僧として最高の境地にあるであろう。—— 誰でも学ぼうと望む人々は —— 。」（中村 元訳『ブッダ最後の旅 大パリニッパーナ経』岩波文庫p.64）

② 「誰でも学ぼうと望む人々は」について、中村 元博士は、註釈で次のように述べています。

「〈絶えず学ぼうと努めること〉〈不断の精進〉が最初期の仏教徒の理想であると解するならば、それが最高の境地であるという思想は十分に筋が立つことになる。」（同p232）

これによれば“自ら真理を学び実践に努めるという境地”が、人間として最高の境地であるというのです。仏の智慧に向かって生長を続けることが、最高の境地にほかならないのです。

(3) 境界

「境界」は、その人がどのような環境の中において、他の人びととどのような関係にあるかということであると、私は解釈しています。

他の人びととの関係という境界は、自分のありかたによって変わってきます。

(4) 自分の価値

「自分の価値」とは、自分が家庭や社会で果たすべき役割をどの程度果たしているかということだと思います。

果たすべき役割には上下の別はありませんから、果たすべき役割をどの程度果たしているかによって、存在価値が定まることになるからです。

【参考】インド北部の気候

三草二木の譬えの背景には、インド北部の気候の特徴があると思われます。日本の東京とインド北部のカルカッタの月別降水量を比較しますと、その特徴がよく分かります。

三草二木の譬えは、雨の少ない乾季から雨の多い雨季への移り変わりを念頭に作られた譬諭であると思われます。

